団地再生卒業設計賞

「せいかつしあう」

豊後　亜梨紗

近畿大学

団地を配置計画、住戸計画ともに、リ・プログラミングするという力作である。計画地は広島市中央区基町の中層市営アパート群の一画で、歴史に残る県営基町アパートの高層住宅群から一望できる位置にある。この案は敷地周辺の充分な分析の基に成り立っている。

計画地は人でにぎわう川沿いの土手や緑地帯に隣接していながらも、周辺との間に存在するレベル差のためにアクティビティから切り離されているという現状を改善するための提案である。川沿いの土手から計画地を横断する複数の動線と、それらに直行する隣接街区につながる動線のマトリックスが配置計画の下敷きとなり、計画は敷地全域にわたって余白を残さず展開されている。

一方住戸計画においては住戸機能を解体、細分化した上で、住戸をプライベート性の高い行為のための「ユニット」と、プライベート以外の行為のための「屋内公共空間」とで再構築している。これらが周辺から人を導入する「屋外公共空間」とともに組み合わされながら住棟が形成される。

この案の魅力は何と言っても、集合住宅の共用部の新しいつくり方にあろう。しかし惜しまれるは、敷地と周辺との関係を表現する広域の断面が示されていないことである。（木下庸子）

団地再生卒業設計賞

「オルフェの生まれる団地」

木全　瑛二

名古屋工業大学

５つか６つの案を見て、団地再生というのは、既存建築再生の宿命として複雑で複合的で、目をこらして読みとらないと事態が分かりにくいものだ、と思った。あと十数案もこの調子で見なくちゃいけないのか、と、うんざり感が出はじめた時、この案が出現した。案が出現というのはヘンな言い方だが、ヘビのような姿が紙の上に躍っているのだから、そう感じてもいいだろう。

私にはヘビに見えたが、木下審査委員はリボンと言っていた。ヘビかリボンか、どっちでもいいように思われるだろうが、ちがう。私にとってはちがう。リボンは工業製品の布から生まれた形だが、ヘビは生き物にちがいない。それも原始時代から人類が生命現象のシンボルとしてきた生き物なのだ。

戦後という科学・技術こそが全てだった時代に、その粋ともいうべき自動車産業の町豊田市に作られた団地にヘビが登場し、科学・技術のこれまた建築的粋ともいうべき団地を貫くのである。

この光景を見て、私として評価しないわけにはいかないだろう。

建築の案としては″一発芸″的だが、意外に現実性もある。（藤森　照信）